

第4回 良心に忠実に・・

まだまだ暑さもつづきますが、田の色はたしかに変化をみせ、ちゃんと季節が進んでいることも感じるこの頃です。みなさん、お健やかに過ごしてですか？

さて前回、わたしたち家族が、先祖である金次郎の姿を「ひとになんと言われようと、周囲にどう思われようと、自分にとって大事なことを貫きなさい」というメッセージとして受けてきたと描きました。しかし、ここにはつづきがあります。家族は言うのです。「自分」と言っても、そこには「悪心」と「良心」の両方があるから、「良心の声に忠実に」大事かどうかを判断しなさい・・と。いつだって自分の良心は、それが自分にとって正しいか、すべきことか、嘘がないか・・を知っているのよ・・と。

あるとき、4歳の娘をもつお母さまが、わが子が最近、ウソをつきはじめたことが気になるとおっしゃいました。ごみ箱の紙屑から、目を盗んでお菓子を食べたことが明らかなのに、いくら尋ねても「食べてない」と言ったり・・。いまは可愛いウソで、追及して叱ることに違和感があるし、かといって放っておいていいとも思えないし・・と。

そのとき、わたしはこの「良心」のお話をしました。するとお母さまは、ふたたび娘のウソに出会ったとき、さっそく言ってみようそうです。この子はカトリックの幼稚園に通っていたので、「あなたのところの中の天使さまも、同じように言っている？正しいことは、ママじゃなくて、あなたのところの天使さまが知っているから、よおく聞いてね」と。するとその子は、明らかにハッとした顔になったと言うのです。

もし子どもが、本当になにが正しいのかを知らないなら、教えてあげることも必要かもしれません。でも、たいていのことは、子ども自身が知っているし、子ども自身が判断できるはずではないでしょうか？ 子どもたちの主体的な力への信頼や、その力を豊かにする工夫もまた、教育の大切なテーマではないかと思ったりします。